

会議議事摘録

会議名	2023 年度第 1 回学校関係者評価委員会
開催日時	2023 年 7 月 1 日 (土曜日) 10 : 00 ~ 12 : 00
場 所	本校 7 階 研修室
出席者 (敬称略)	<p>①委員：赤塚敦子(看護関連業界関係者)、石川幹夫(卒業生)、川井佳樹(くすり関連業界関係者)、黒田江里(保護者)、篠塚 功(医療事務関連業界関係者)、藤井寿和(福祉関連業界関係者)、森川雅彦(高等学校関係者)(計 7 名)</p> <p>②学校：川口拓也(校長)、前田律子(副校長)、榊原幸之(事務局長)、村山由美(医療秘書科学科長・医療事務科学科長)、石澤雅子(医療秘書科副学科長、医療事務科副学科長)、川畑亮子(医療事務 I T 科学科長・診療情報管理科学科長)、結城久美子(くすり・調剤事務科学科長)、渋谷大樹(くすり・調剤事務科教員、教務委員長)、松田朗(介護福祉科学科長)、伊東由美(看護科学科長)、光本文仁(キャリアサポートセンター長)(計 11 名)</p> <p>③委員会事務局：土屋瑠美子、土方雄太(計 2 名)</p> <p style="text-align: right;">(参加者合計 20 名)</p>
欠席者 (敬称略)	なし
配付資料	<p>①事前送付：</p> <p>□資料 1：2023 年度学校関係者評価委員会名簿、□資料 2：2022 年度第 3 回学校関係者評価委員会議事録案、資料 3：2022 年度第 3 回委員会以降の主な経過報告 別添 A：2023 年度校務分掌・組織図、別添 B：2023 年度学事日程・オープンキャンパス日程、別添 C：2023 年度クラス担任一覧、別添 D：2022 年度進路決定状況・求人件数、別添 E：2023 年度教員研修計画・実績、別添 F：2022 年度授業公開実施報告書、別添 G：2023 年度授業公開実施要領、別添 H：2023 年度前期授業アンケートの実施計画、別添 I：2023 年度教育課程編成委員会名簿、資料 4：2022 年の重点目標と達成するための計画・方法、資料 5：2021 年度学校関係者評価報告書に示された意見・課題への取り組み、資料 6：2022 年度活動の自己評価報告書 点検大項目</p> <p>②当日配付・閲覧資料 学生生活ガイド(6 学科、看護科)、2023 年度講義要項(全学科)、Challenge 就職活動ノート、2024 年度入学案内書、2024 年度募集要項(6 学科、看護科)</p> <p>③当日回覧資料 2022 年度活動の自己点検・自己評価報告書(点検中項目)、各種検定・資格試験取得率</p>
議題等	<p>1. 今年度委員(資料 1 参照)及び新任者(委員、本校)の紹介 事務局より、資料 1 に基づき、今年度の委員及び本校教職員の新任者について紹介があった。</p> <p>2. 校長挨拶 川口校長より、本校は、昭和 10 年に早稲田式速記普及会としてスタートし、昭和 26(1951)年に早稲田速記学校と改称した。その後始めた秘書教育が医療秘書科の開設につながり、今では医療秘書科に加え、医療事務 I T 科、診療情報管理科、くすり・調剤事務科、介護福祉科、看護科を持つ医療・福祉の学校に転換している。 平成 27 年に文部科学省が専門学校の質保証を掲げ、一定の要件を満たした場合に職業実践専門課程としてお墨付きを与える制度ができた。この学校関係者評価委員会はその認定要件の一つである。 3 年にわたるコロナ禍が明け、ようやく日常が戻ってきたが、この間、世の中も学生の気質も大きく変わっている。私たち専門学校、特に医療・福祉分野はエッセンシャルな分野であり、ここを志望する学生がいなくなることは日本にとってゆゆしき事態だと思っている。学生をしっかりと教育し、世の中に出していくためにも先生方の積極的なご指導をお願いしたい、との挨拶が行われた。</p>

3. 2022 年度第 3 回委員会議事録について

事務局より、事前に配付した前回議事録案（資料 2）について修正等の意見を求めたところ、特段の意見がなく、原案のとおり承認された。

4. 2022 年度第 3 回委員会以降の主な経過について

校長、事務局長、キャリアサポートセンター長、教務委員長、委員会事務局より、資料 3（別添 A～I を含む）に基づき報告し、確認、了承された。委員からの質問・意見及びその回答は別紙のとおり。

5. 2022 年度重点目標の取り組み年度末点検報告

校長より、資料 4 に基づき報告し、確認、了承された。委員からの質問・意見及びその回答は別紙のとおり。

6. 2021 年度学校関係者評価報告書に示された意見・課題への取り組み年度末点検報告

資料 5 に基づき、ページごとに質問・意見を徴し、確認、了承された。委員からの質問・意見及びその回答は別紙のとおり。

7. 2022 年度活動の自己評価報告書（点検大項目）について

資料 6 に基づき、基準の大項目ごとに質問・意見を徴し、確認、了承された。委員からの質問・意見及びその回答は別紙のとおり。

8. 意見交換など

詳細は別紙のとおり。

9. 次回日程、その他

事務局より、事前に日程調整をさせていただきたい。お一人ずつ総評をいただくことになるのでよろしくお願ひしたい、との説明があり、了承された。

以上

2023 年度第 1 回学校関係者評価委員会の主な討議内容

次第 4. 2022 年度第 3 回委員会以降の主な経過について

○川口校長、榊原事務局長、光本センター長、渋谷教務委員長、事務局土屋より、資料 3（別添 A～I 含む）に基づき報告が行われた。（報告部分省略）

○委員からの質問・意見と回答は次のとおり。

委員からの質問・意見	質問・意見への回答
新しく立ち上げた募集委員会の活動内容を伺いたい。	毎月 1 回定期会議を行っている。募集広報活動の活性化を目的とし、オープンキャンパスの参加者増と学校の魅力をいかに知ってもらうかの 2 つを大きな柱として活動している。 従来、教員組織と事務組織が割と明確に分かれていたが、学校全体で募集活動を行うことにした。
キャリアサポート委員会の活動内容と停止した理由を教えてください。	キャリアサポ委員会は、就職指導（キャリアサポートプログラム）の充実、インターンシップへの対応を主に活動していたが、今後はキャリアサポートセンターで継続する。 停止した理由は、教員の負荷を軽減し、その分を募集に力を注いでもらうという趣旨である。
看護はコロナ禍でも希望者が増えていると聞きます。	看護も年々落ちてきている。四年制大学志向の高まりと都立看護との競合が要因と見ている。
東京が少ない理由を分析しているか。	東京都は四大進学者が 7 割を超え、他県を圧倒している。特に区部で専門学校進学者が減っているので、多摩地区に力を入れている。
オープンキャンパスの内容も充実し、パンフレットも見やすく分かりやすいと思うが、学力の高い生徒を対象にするのであれば、もっと格調の高いパンフレットが欲しい。分冊でもよいので、3つのポリシーや実際の授業内容、仕事内容などを書き込み、働きがい・生きがいにつながる内容にしてはどうか。	もともとは文字の多いパンフレットだったが、競合校も意識し、硬軟のバランスを取った形になっている。
専門分野の就職率が 99.6%で、正職員率が 93.6%となっているが、この 6%の差は、学生が正職員を希望しなかったからなのか、それともなれなかったのか。	大学病院の中には契約職員でしか採用しないところが幾つかあるが、それでも行きたいという学生がいる。

<p>①退学率について、大学等の調査を見ると7週間過ぎた頃から欠席が多くなり、夏休み後に退学につながる傾向がある。現時点で休みがちな学生は何%ぐらいいるか。</p> <p>②休みがちな学生を入学時に見分けられないものか。</p> <p>確かに、高校から専門学校や大学へ進むと大きな変化がある。高校との連携、保護者との連携を具体化して進めていくとよいと思う。</p> <p>日本医療秘書学会の研修は、かなり意味があったと感じているので、復活を検討してほしい。</p>	<p>①15週の授業のうち10回以上出席しないと単位が取れないが、1年生で今の時点で欠席が5回を超えている学生が数名いる。ある程度欠席がかさんできると担任が保護者に連絡をする。</p> <p>②入学の段階で高校時代の欠席数はある程度分かっているが、環境が変わることで意識が変わる学生も多く見ているので、それを期待しながら教育をしている。</p> <p>検討したい。</p> <p>今年度はオンラインで開催されるので、引率は考えていない。今後は検討したい。</p>
--	---

次第5. 2022年度重点目標の取り組み年度末点検報告（資料4参照）

- 川口校長より、重点課題として入学定員の充足、18歳以上の教育について学校全体で取り組む流れにあるとの報告が行われた。
- 委員からの質問・意見と回答は次のとおり。

委員からの質問・意見	質問・意見への回答
<p>大きな公的病院などでは、若い人にポジションを譲った後の職員を教育して、現場の仕事ができるようにしたほうがよいのではないか。</p>	<p>政府が進めているリスキリングはデジタル教育が人気を集めているが、調理や美容などの現場で働いていた人や、パソコンを使ってこなかった人に対して、我々の医療・福祉の教育、コンピューターのオペレーションは一定のニーズがあると思っている。そこを厚くしていきたい。</p>

次第6. 2021年度学校関係者評価報告書に示された意見・課題への取り組み年度末点検報告（資料5参照）

- 委員からの質問・意見と回答は次のとおり。

委員からの質問・意見	質問・意見への回答
<p>東京都の離職者等再就職訓練（医療・調剤事務科3か月コースの1月生）を修了した後、学校でフォローしているか。また、次のステップはあるのか。</p> <p>アクティブラーニングについて、各学科でどのように取り組んでいるか。また、問題点などがあれば教えてほしい。</p>	<p>1月から3月まで、ハローワーク経由で実施した。修了後、正規雇用、パートで4か月以上働いた方を把握するために連絡を取っている。次の展開として、今日、介護職員初任者研修3か月コースの説明会を開いている。</p> <p>○医療秘書科：近くの席の4～6人でグループになり、役割を持たせて授業を進めている。</p> <p>○医療事務IT科・診療情報管理科：学生にとっては新鮮で、アンケートでもよい評価を得ているので、引き続き、合う授業を精査しながら増やしていきたい。</p>

<p>がん登録実務初級者認定試験は例年高い合格率を上げているが、中級、上級も存在するのか。中身はどのような内容か。</p>	<p>○くすり・調剤事務科：比較的人数が少ない学科で、グループワークをしやすい授業内容でもあるので、様々な方法で実施している。コミュニケーションを取るのが苦手な学生もいるため、積極的にグループのメンバーを交代させて、その結果でまた考えるという形で進めている。</p> <p>○介護福祉科：新卒者、社会人、離職者訓練生、留学生と様々な学生が1つのクラスで学習をしているので、それ自体がアクティブラーニングでもある。個々の課題をグループダイナミズムの中でいかにクリアしていけるかが悩ましいところである。日本語能力が問われる内容になると個人差が激しく、課題をクリアできないことが多々ある。</p> <p>○看護科：社会人と現役生が半々のクラス構成で、それぞれの強みをグループの中でどう生かしていくかに苦慮している。社会人だけのグループにしたほうが知識が深まる場合と、混ぜたほうが発展していく場合がある。</p> <p>中級、上級もある。がんには様々なタイプがあり、大学病院などではそれを調べて国に報告する規定がある。その作業ができるためのがんに特化した試験である。</p>
---	---

次第7. 2022年度活動の自己評価報告書（点検大項目）について（資料6参照）

○委員からの質問・意見と回答は次のとおり。

委員からの質問・意見	質問・意見への回答
「2-40プロジェクト」はまだ生きているのか。	今は TPC などに置き換わっているが、もう少し整理の時間をいただきたい。
各学科の3つのポリシーはどこに書いてあるか。	毎年出している学科運営計画に載せてある。
中期計画はどこにあるか。	学園で設定したものを各教員が持っている。資料に載せるかどうかは検討させていただきたい。
教員の数は充足しているのか、現状を教えてください。	設置基準上の数は満たしているが、学科によってもう少し手厚くしたいところがある。求人活動はしているが、なかなか計画どおり進んでいない。
コマシラバスを作り出すと教員の負担が大きくなると思うが、本当に作られるのか。	理想的にはあったほうが良いと思うが、世の中の変化のスピードが速くなっているため、現実的ではないと個人的には思う。
受検者数、合格者数の目標と実際の数値にどのぐらい差があり、どうすればよいかを検討した結果を見ることはできないか。	国家資格系の学科は、可能な限り 100%に近づけていく。それ以外の検定は、昨年の実績、全国平均を下回ることがないように目標を設定して、ほぼクリアしている。複数の級があるものは上位級の取得を目標にしている。

<p>卒業生の就職先からの評価がもっと見えるとよい。就職後の追跡調査や就職先からの声を積極的に収集してデータベース化しているか。</p>	<p>介護福祉科は実習先に就職する学生が一定数いるので、実習時にヒアリングを行うほか、卒業生が学校に来たときに就職先での状況を具体的に聞いている。評価を数値化して記録に残していないので、今後は必要かと思う。 医事系は病院実習の途中で訪問して聞き取りを行い、データベース化している。</p>
<p>学生相談コーナーの利用状況を知りたい。</p>	<p>相談件数は押さえていないが、毎週 1 日、曜日を固定しない形で実施している。次回に利用状況、相談内容をお示ししたい。</p>
<p>学費の分納者の数は分かるか。</p>	<p>毎月入ってくる貸与の奨学金も活用して支払いたいという学生もいる。 本校生のうち公的な奨学金の利用者は 6 割ぐらいになる。</p>
<p>給付型はどうか。</p>	<p>学生が全部で 600 人とする、毎年 70～80 人の間で採用されている。</p>
<p>ホームページはすごくポップな明るい感じだが、学びという点をもう少し前面に押し出してもよいのではないか。</p>	<p>5 月に全面リニューアルをしているので、それをご覧いただき、またご意見があれば次回に聞かせていただければと思う。</p>
<p>ボランティアをぜひ奨励していただければと思うが、現状はどうか。</p>	<p>再来週にボランティアセンターにアポイントを取っている。アドバイスをいただき、取り組みを進めていきたい。</p>

次第 8. 意見交換など

異業種から介護に入ってきた人たちに 4 年間かけて年間 100 人単位のインタビューを続けている。共通して言われるのは、「何歳までも働き続けられる」「どこでも働ける」の 2 つで、今までより現実感のある魅力にひかれて介護業界に入ってきていることが分かってきた。

19～24 歳の若い人たちが、高校卒業後の就職先にミスマッチを感じて結構介護業界に入ってくる。聞いてみると、親や祖父母が介護をしている、中学生のときにボランティアで介護施設に行った経験がある、自分の祖父母が介護が必要になり看取った経験があるという 3 つのパターンが多い。

地方の人のほうが介護人材になり得る可能性があると思っている。1 都 3 県の周りがある県が募集しやすいのではないか。

介護福祉士の課程自体が特養など重度の方向けの教育になっているので、都内の高校に介護の仕事を伝える行くと、三大介助のイメージしかない。しかし、介護は人と一番接することができる仕事で、コミュニケーションが大切だと伝えると、やってみたいという意識が変わってくる。実習先、就職先のイメージを変えることが、募集にとっての大切なキーワードだと思う。

介護施設側は人材不足なので、一定の年数介護施設でアルバイトをしてくれることで、卒業時に施設側が奨学金の返済を肩代わりするところも多くなってきた。特に、沖縄の子たちがその制度を使われているので、その辺もうまく関わりが持てるとよいのではないかと思う。

以上